

上海ソーシャルワークにおける園芸療法の実践

— 認知障害高齢者を例として —

○ 上海師範大学 氏名 劉 晴暄

龍進宇 (上海師範大学)

キーワード：園芸療法、ソーシャルワーク、認知症

1. 研究目的

近年、園芸療法は新たな介入方法として、中国のソーシャルワークサービスに導入され、その需要度が年々増加していく傾向が見られる。本研究は、園芸療法のこれまでの歩み（スタート、変容、成長）を概観し、生活環境の質的向上と社会福祉の基盤改善における園芸療法の役割を認識し、上海のソーシャルワークサービスにおける園芸療法の実践成果を報告する。本研究は園芸療法が評価されつつある現状を見据えながら、園芸療法の将来性を展望する。

2. 研究の視点および方法

園芸療法はメンタルヘルスと自然療法を組み合わせた創造的な療法である。この療法がソーシャルワークの実践に適用される場合、需要側が求める社会的機能の回復に如何に園芸療法をマッチングさせるかを最も考慮しないといけないことと考える。現在、園芸療法が身体、精神、社会、自然の四つの視点からその役目が期待され、ソーシャルワークによるサービス提供を構成している。

まず、身体機能の回復における園芸療法の役割としては、ガーデニングなどの植物栽培、日常の手入れ、成長過程の観察・鑑賞などの活動を通して、参加者（園芸療法の受け側）の身体機能や生理機能を高める効果を得ることができる。第二に、精神、心理的機能の回復における園芸療法の役割としては、植物と触れ合い、その触れ合いが確実に成果を築くことによって、参加者の五感が刺激され、物事の認識度、栽培者としての責任感、人間の自尊心と自信が取り戻せ、病気による緊張や不安が和らげられる。第三に、社会的相互作用の視点から、園芸療法によるグループ内の人間同士の相互作用が、コミュニケーション能力の回復、助け合い精神の芽生え、より緊密なメンバー同士の交流や協力が生まれ、グループ帰属意識をもたらされる。最後に、園芸活動における人間と植物との相互作用は、参加者の身体内部のバランス及び身体と自然のバランス感覚が取り戻され、自己と他者（他の人間、自然）との調和が確立されることを目指せる。本研究は、このような「身体、精神、社会、自然」関連機能の回復における園芸療法の役割を念頭し、認知障害高齢者を対象に、ソーシャルワークサービスにおける園芸療法を行われてきた。

3. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、園芸活動を実施した高齢者には、研究の目的を説明し、結果は研究以外の目的で使用しないことを説明した。そして、参加者の同意を得ている。さらに、匿名化をするなど、論理的配慮を行った。

4. 研究結果

本研究が行われてきた上海認知障害高齢者園芸療法実践は、2011年より開始し、ナーシングホーム、デイケアセンターなどに通っている100人の高齢者を対象とした。まず、認知障害高齢者の身体状況、介護者からの回復期待などについて質問票及びインタビュー調査で把握した。次に、認知障害高齢者の趣味愛好などに合わせ、園芸療法のテーマと内容を個別に設計し、参加しやすく参加したくなる園芸グループ活動の工夫を行われた。そして、実施した園芸グループ活動には、グループによる屋内植栽、屋外植栽、手工芸品の生産などが含まれる。一方、ソーシャルワークの介入として、記憶力アップ、抑うつ、孤独解消、ポジティブな気分の生成促進などを実施した。本研究は、園芸活動が認知障害高齢者に生理学的、社会的、認知的機能の改善に良い影響を与えたことが実践結果の分析によって明らかにする。

5. 考察

目下、生活水準の向上に伴い、ソーシャルワークサービスに対する認識が高まり、園芸療法に対する関心が集まるようになるが、その認識度は依然として低い。今後、より地域文化、自然環境の特性に適した園芸療法を多くの需要者に提供できるように、ソーシャルワーカーの育成、地域との連携、住民への園芸知識の普及、園芸療法の周知などが必要不可欠になるのであろう。